



- ◇変革と創造により新時代を切り拓いていく年に！ 村田 武一郎(NAED 理事長)
- ◇清酒発祥の地ー奈良市菩提山町正暦寺 井ノ本直三(NAED 副理事長／地域 P&C 第 2 期生)……2 頁
- ◇働き方改革で、地域づくり人材が増える!! 堀越正夫(NAED専務理事・事務局長／地域 P&C 第 3 期生)……4 頁
- ◇SDGs の 17 の目標に対し市民が重視する項目は何？ 原田弘之(地域 P&C 第 2 期生)……5 頁
- ◇瀨峡水中探検 城者定史(地域 P&C 第 5 期生)……6 頁

## 変革と創造により新時代を切り拓いていく年に！

村田 武一郎(NAED 理事長)

皆さま、今年もよろしくお願ひ致します。

コロナ禍がこんなにも続くとは……。ワクチン接種への道程が、ようやく見えてきました。今年は、誰もが幸せを感じられる穏やかな年であることを、同時に、変革と創造により新時代を切り拓いていく年であることを願ひます。

1980 年代、広域圏計画に携わっていた私たちの合言葉は、「21 世紀へ向けて」でありました。「希望と活力に満ちたすばらしい 21 世紀社会を創るために、その基盤を今から準備していくこと」が広域圏計画の使命と考えられていました。基盤の最たるものは「交流基盤」でした。そして、私たちは、高度な交流基盤を手に入れました。高速で移動する広域的・国際的な交通基盤、人・モノ・情報が集積し新価値を生み出す交流基盤、どこにいても誰かと瞬時につながれる、情報を発信・入手できる通信基盤などを得ました。人と人との交流が希望と活力を生み出す源泉であることは間違いありません。30 年、50 年先を見据えた広域圏計画の方向性は正しかったのです。

しかしながら、前 2 者による交流の拡大が微小生物による重大な健康リスクを孕んでいるとは想像すらしませんでした。交流基盤の充実は、“国土の均衡ある発展”すなわち各地域の持続可能性の拡大へも展開していくものと考えられていましたが、東京一極集中は止まらず、広域的な局所集中(広域圏の中心都市である大阪市・名古屋市・札幌市・福岡市などへの集中)も加速しました。皮肉なことに、交流基盤の充実による利益を得てきた集中拠点がコロナ禍に疲弊しはじめています。

通信基盤の充実、各地域の主体的な情報発信を可能とし、各地域の特性・産品などへ目を向けさせる役割を担っています。また、どこにいても仕事ができる社会となりつつあります。しかしながら、各地域とは関係がない企業が、各地域を売り物にしてネットショッピングで利益を上げているという見方もあります。SNS を都合よく使った某大統領によるアメリカ社会の分断、デマ・誹謗中傷問題の蔓延なども、想像の枠から大きく外れています。

コロナ禍が続くなかで思い知ったことがいくつもあります。人と人とのつながりのかけがえのなさ、サービス産業の構造転換の必要性、若者の“ジコチュー”と危機意識の希薄さ、政治のリーダーシップの重要性、SDGs (Sustainable Development Goals) と EDGs (Ecological Development Goals) への取り組みの喫緊性、……。

しかし、悪いことばかりではありません。強烈なカウンターブローが、目覚めと変革をもたらしています。例えば、ようやく、東京一極集中から脱出する兆しが見えてきました。各地域へ移住した人たちの喜びや安堵に満ちた声がよく報道されています。ある人材派遣会社は、淡路島へ本社機能の一部を移転しました。数々の新サービスや新技術も生まれています。

一方、地球環境は危機的状態にあります。平均気温上昇 1.5°C の限界に近づいています。この 10 年で今の状態から脱しなければ、悲惨な状況が待ち受けているという警告情報が溢れだしています。地球環境問題とコロナ

禍は同じ問題でもあります。一人ひとりの意識変革がなければ、そして、その集合体(地域・企業など)の総意がなければ、問題は解決しません。1992年の地球サミットから30年、若者たちの地球環境問題への積極的な取り組み、地球環境問題の解決に使命感をもって取組まなければ未来はないと考える企業も増えてきました。

年頭にあたり、皆さまのご健勝とご発展を祈ります。また、各地域においてSDGs・EDGsに関する住民参加の議論が盛んに行われ、将来像を明確化し、地域の多様な関係者の「共働」によって地域の将来を拓いていく地域づくり活動が成果を挙げ持続発展することを祈ります。コロナ禍の速やかな収束、地球環境問題の改善も！

## 清酒発祥の地—奈良市菩提山町正暦寺

井ノ本直三 (NAED 副理事長 / 地域P&C 第2期生)

### 1. はじめに

奈良市菩提山町正暦寺が清酒発祥の地であることをご存じの方も多いでしょう。桜井市の「大神神社」は酒の



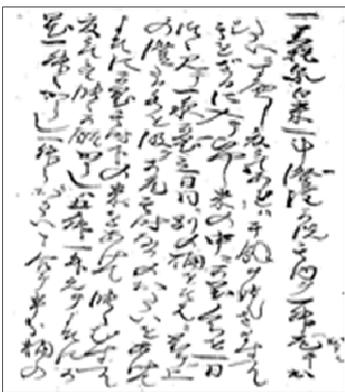
神を祭る神社として有名で、清酒発祥の地は「正暦寺」が奈良では通説となっています。なお、全国には酒に関係が深い神社がたくさん知られています。

日本の酒は、神社と関係が深く、神話の時代にすでに登場しており、その後、奈良・平安期の律令時代の酒として発展したと考えられています。当時の酒は、私たちが口にする清酒とは大きく異なり、白濁した、味が濃い、濁り酒タイプの酒であったようです。

本稿では、清酒発祥の地・奈良における酒造りの歴史的な背景と奈良の名酒復活へ向けた取り組み、毎年1月初旬に開催されている正暦寺の「清酒祭」と「地域P&C 養成塾の現地研修」について紹介します。

### 2. 室町時代の酒の味を求めて

室町時代(1441～1444年頃)、奈良市菩提山町正暦寺で、僧坊酒として清酒を製造していたことが、室町時代に著された酒造記『御酒の日記』(豪族・佐竹氏による日本で初めて酒造りを調べた日記と言われている)に“菩提泉、白米一斗澄程可洗(白米一斗を水が澄むほどに洗いなさい)から始まる酒造りの手法が記されていました。



これをヒントに、1996年、県内の酒造メーカー14蔵、県工業技術センター食品技術研究チームと正暦寺により「奈良の豊富な歴史遺産の活用と酒造史における奈良の歴史や役割を見直し、清酒開発を行い、奈良の名酒を復活するとともに、奈良の酒造りの技術を次の世代に伝える」といった目標が定まり、『奈良県菩提山による清酒製造研究会』を発足し、研究がスタートし、約3年にわたり基礎研究を重ねました。

研究会では、清酒醸造に用いるための酵母“酒母”である菩提醗を造るための乳酸菌が必要で、正暦寺境内や菩提山周辺の探索を重ね、漸く2年後の1998年、境内の湧水から乳酸菌を検出することができました。

研究会では、清酒醸造に用いるための酵母“酒母”である菩提醗を造るための乳酸菌が必要で、正暦寺境内や菩提山周辺の探索を重ね、漸く2年後の1998年、境内の湧水から乳酸菌を検出することができました。

### 3. 名酒復活に向けて

酒造記『御酒の日記』に基づき、正暦寺から探索した乳酸菌を用い、1999年1月、菩提醗の製造が始まりました。製法の特徴として、①生米を使う。②生米と水を加えたところに乳酸菌を加え、“そやし水”を造る。③醗造りのはじめに“そやし水”を使用することで雑菌を抑え、酵母を増殖させ優良な“酒母”を造る、という工程を確立しました。

お寺で酒造りを行う例がなかったため、正暦寺での500年ぶりの酒造りの復活が注目を集め、新聞やテレビで盛んに報道されました。

当初は、温度管理など試行錯誤が多く、研究会メンバーが交代で泊まり込み寝ずの番をしていましたが、数年後にはデータも揃い、安定した造りができるようになりました。

でき上がった『菩提酏』を各自の蔵に持ち帰り、酒造りをします。約20日間、蔵やタンクの温度管理を行いながら“もろみ”を育て、菩提酏純米酒を製造します。

3月下旬、菩提酏清酒品評会で基準味の審査があり、ブランド基準に合格したのち、最終工程のろ過、火入れ、瓶詰め作業を経て、桜の花咲くころ店頭に並ぶのです。



#### 4. 第13期地域P&C養成塾現地研修として清酒祭に参加

正暦寺の清酒祭は、史実に基づき、地域づくり・観光振興などの意義があることから、第13期地域P&C養成塾で紹介したところ、塾生がとても興味をもち、「養成塾現地研修」として新規企画することになったものです。

私が県職員として県工業技術センター所長時代(2009～2011年)、食品技術研究チームが正暦寺の幻の名酒「菩提酏清酒」の復活に貢献してきたこともあり、私も2年間は清酒祭のサポートに関わり、その後も、毎年開催の「清酒祭」に顔を出してきました。このようなこともあって、当時から正暦寺住職とは親しく、今回の「養成塾現地研修」にも快く応じてもらい、住職直々に説明をいただけることとなりました。

1月9日(土)の「清酒祭」当日は、塾生6名、サポーター5名の計11名が参加しました。前日からの寒波到来で、晴れ間が見えたものの、冷気が厳しい一日でした。また、コロナ禍にあつて、会場の随所に感染拡大防止用の立看板があり、密を避けるなどの感染防止対策を講じながら厳粛に“菩提酏清酒造り”が執り行われました。



住職から、正暦寺は、正暦3年(992年)創建され、往時は86坊堂塔伽藍が立ち並び、25万坪の広大な面積を有する菩提山真言宗の大本山で、全国からの300人を超える僧侶が居たが、南都焼き討ちや戦国時代の焼き討ち、さらには、明治16年に窃盗犯による焼失などにより荒廃し、今は、本堂、鐘楼、福寿院を残すのみであるとの説明をいただきました。往時の威容は、参道沿いに延々と続く石垣によって偲ぶことができます。また、室町時代の酒造りは、寺の経営を賄う金策でもあったとともに、菩提山川の綺麗な水、水文化を守ってきたものであることなど、貴重な説明もいただきました。

#### 5. おわりに

近年、若者の清酒ばなれなどもあって清酒業界は厳しい状況が続いており、日本酒で乾杯などの取組みもありますが、この『菩提酏清酒』も当初の14蔵から8蔵へと減少してきています。

機会があれば、各蔵の個性をもった『菩提酏清酒』を味わっていただくとともに、室町時代に想いを馳せていただければありがたく存じます。

## 働き方改革で、地域づくり人材が増える!!

堀越正夫(NAED専務理事・事務局長／地域P&C 第3期生)

### 1. はじめに

2020年末にインターネットで、英国のブレグジットに関する記事を読んでいた時、英国ブレグジットにより企業の経費が高くなるという内容で、労働にかかる費用について「人権費」と、誤変換されている箇所を見つけました。最近、仕事柄、厚生労働省の施策変更により「働き方の規定」について関わるが増えています。そんなことから「人件費」を、「人権の費用」とも思える昨今です。

政府が推進している政策は、「働き方改革」という名称で呼ばれています。会社で勤務する労働者に関する規定が、この数年、変更されてきています。

このような変更が、地域づくり活動にどのように関わってくるのか。「働き方改革」で、地域づくり活動時間ができて、地域づくり活動にもっとも参加者が増えるかもしれません。

### 2. 仕事と「地域づくり」の関わり方

人々は、「地域づくり」にどのように関わっているのでしょうか。地域づくりでは、勤務する会社が「地域づくり」に関わっている場合を除いて、仕事以外で「地域づくり」に参加することになります。また、会社を辞めるなど、リタイアした後、関わる方の方が多いのかもしれない。

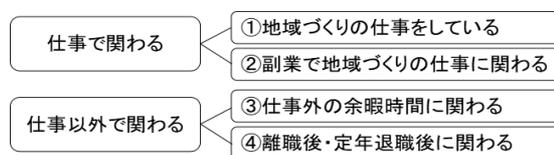


図1. 地域づくり活動への関わり方

### 3. 地元で仕事をしている人はどれぐらいいるのか

住んでいる地域で仕事をして、仕事が地域づくりと直結しているということを考えると、「地元で開業している自営業」、「農業従事者」が考えられます。そこで、奈良県下の「自営業者」と「農業従事者」を、2010年・2015年の国勢調査結果で見ました。

表1. 奈良県の就業者数(国勢調査)

西暦年	2010年			2015年		
	総数	男	女	総数	男	女
総数	596,525	345,070	251,455	590,818	331,704	259,114
内訳	雇用者	502,597	287,164	504,328	277,505	226,823
	自営業主	59,512	47,047	12,465	56,223	43,918

注)就業上の地位不明があるため、内訳合計は総数にはならない。

就業者のうち「雇用者」は、84%から85%と増え、「自営業者」は10%から9.5%に減少、「農業従事者」の人数も減っています。奈良県では、雇用労働者が増えていることがわか

表2. 奈良県の職業別15歳以上就業者数(国勢調査)

西暦年	2010年		2015年	
	実数	割合(%)	実数	割合(%)
農林漁業従事者	15,690	2.6	15,260	2.6

ります。地域づくり活動参加者を増加させるには、雇用労働者にも参加を呼びかける必要があるようです。

### 4. 「働き方改革」で地域づくり活動に人を呼び込む

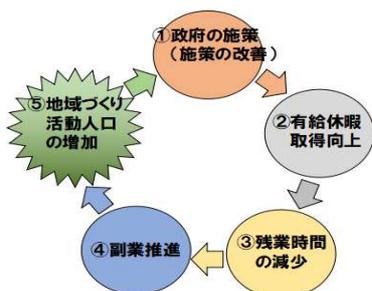


図2. 働き方改革から地域づくりへ

働き方改革で政府が主眼としているのは、人口の減少による労働力の不足対策です。女性の労働力活用、高齢者の雇用延長も施策の一つとなります。また、働き方改革では、労働環境を向上させる規制がつけられています。労働時間に関するものとしては、①有給休暇取得の向上、②残業時間の適正化などです。

改革の良い効果として、雇用労働者に活動時間ができ、もっと地域づくり活動に参加していただけるのではないのでしょうか。

## SDGs の 17 の目標に対し市民が重視する項目は何？ —「自分の地域のため」と「世界のため」で選ばれる項目の違い—

原田弘之(地域 P&C 第 2 期生)

SDGs(国連が定めた持続可能な開発目標)が世界的に注目を集めており、NAED でも昨年からの取り組みが始まりました。ここでは、私が仕事で関わった自治体における市民アンケート調査(関西のある自治体の 20 歳以上の市民 3,000 人を対象。設問は複数回答)で、SDGs に関連する部分を紹介します。



SDGs(持続可能な開発目標)17の目標

SDGs は図のように 17 の目標を掲げています。市民アンケートでは、その 17 の目標について、(A)自分の住んでいるまちで重視すべきことは何かと、(B)地球や世界のために貢献すべきことは何かの 2 種類について聞きました。まず、(A)については、第 1 位:住み続けられるまちづくりを(68.2%)、第 2 位:すべての人に健康と福祉を(57.7%)、第 3 位:質の高い教育をみんなに(40.7%)でした。まあ成熟社会としては納得できる結果かなという感想ですが、第 4 位に、働きがいも経済成長も(28.1%)がランクインしたことは今の日本の価値観を反映しているなあと感じました。年代別では第 1 位~3 位までには同じ項目が入っていますが、30 歳代と 40 歳代では「質の高い教育をみんなに」が第 2 位となっており、子育て世代という特徴が出ていました。

一方、(B)地球や世界のために貢献すべきことについては、第 1 位:安全な水とトイレを世界中に(32.5%)、第 2 位:飢餓をゼロに(30.4%)、第 3 位:気候変動に具体的な対策を(30.0%)、第 4 位:貧困をなくそう(28.0%)、第 5 位:平和と公正をすべての人に(26.8%)となり、上記(A)と較べていずれも数値的には高くはありませんが、20%以上となった項目が 17 項目のうち 7 つあり、全体として多様な項目が選択されています。特徴的なこととして、上位の項目は、上記(A)と見事に違う項目が選択されており、我がまちの問題と世界の問題が異なる認識であることがわかります。また、年代別で第 1 位のものがそれぞれ異なり、20 歳代では「貧困をなくそう」、30 歳代は「エネルギーをみんなに、そしてクリーンに」、40 歳代は「安全な水とトイレを世界中に」、50 歳代と 60 歳代は「飢餓をゼロに」、そして 70 歳代は「気候変動に具体的な対策を」でした。これらをどう解釈したらよいのかは諸説あるところかもしれませんが、いずれにしても、自分の住んでいるまちだけではなく、世界そして地球のことも同時に考えなければいけない時代になっていることが市民レベルでも当たり前になりつつあるのではないかと思います。グローバルに考え、ローカルに動くことがよりいっそう求められる時代かもしれません。

## 瀬峡水中探検

城者定史(地域P&C 第5期生)

我々ダイバーは、通常、海をフィールドとしており、淡水(川や湖)に潜る機会はありません。しかし、近年は、熟練ダイバーが、普通のダイビングでは飽き足らず、ちょっと変わった場所でのダイビングを求める傾向もある。

私たちは、海洋・環境系分野を目指す学生たちと、海や環境再生に関する様々なプロジェクトを企画し、「水」をキーワードとして、海・山・川をつなぐネットワークづくりに取り組んできた。特に、スクーバダイビング技術と水中撮影技術を使って、海中洞窟や水生生物の地域資源調査や撮影を行ってきた。

昨年、ご縁があり、十津川村の瀬峡に潜る機会に恵まれた。地域おこし協力隊の角田さんが語るところによると、瀬峡にはスズキやウナギがいるらしい。奈良県の山奥に海の魚が遡上してくるのだ。それはまさに、海と森のつながりを実感できる事実である。しかも、コロナ禍ということもあり、観光船の往来が止まっている時だからこそできる。瀬峡に潜るのは、今しかない。早速、川舟観光かわせみさんの協力を得て、日本ダイビングプロジェクトのCEOの指導のもと、私が勤務する大阪ECO動物海洋専門学校のダイビングゼミの学生たちを含め9名で瀬峡水中探検を執行した。



水中は、透明度が悪く、生物の姿もあまり観られなかった。川を流れながら、切り立った奇岩の景観を水面から眺めるドリフトダイビングは迫力があつた。

もう1カ所、滝壺でのダイビングを検証した。子どもの頃、「滝壺に近づくな」「滝壺には主がいる」とよく言い聞かせられた。それは本当なのか。滝壺の危険性も含めて検証した。もちろん、あらゆる危険を想定したうえのことである。恐る恐る滝壺へ近づいて行った。滝壺に落ちて来る水流が凄い。もの凄い水圧で落ちて来る。ドドドドドドッと、体の周りで幾つもの太鼓を連打されているような振動が体を芯から震えさせる。心の底から震えた。滝壺に潜った者は、体の芯から震えさせるその振動が皆ヤミツキになった。また体験してみたい！ そう思わせた。もちろん、十津川の自然と滝壺に畏怖の念を忘れてはならない。



今年の夏は、大阪と和歌山県の白浜と十津川を結び、コアな客層に向けて海と森のつながりを体感させるダイビングツアーを企画したい。ダイビングと水中撮影という特殊な技術を活かし、今後も「水」をキーワードとして、地域資源の発掘や調査・検証に貢献していきたい。